

要 旨

本研究は、児童が学習で身に付けた言葉の活用について、日常生活につながるような学習指導の在り方を探ったものである。「読むこと」領域の文学的な文章を読み取る際に、児童が読み取った文章の内容について、自分の思いや考えをもつことができるための3つの段階を踏まえた読み取りの授業を行う。その第2段階「Ⅱまとめる」で、児童に、自分の思いや考えをまとめる力につながる言葉を示した後、型の工夫と視点を取り入れた「言葉日記」の取組を行った。これらの手立てを取ることによって、児童は感想を明確に書きまとめることができるようになってきた。

〈キーワード〉 ①身に付けた言葉の活用 ②思いや考えをまとめる力 ③「言葉日記」の取組

1 研究の目標

身に付けた言葉を活用できる児童を育成するために、「読むこと」領域の学習において、自分の思いや考えをまとめる力を高める指導の在り方を探る。

2 目標設定の趣旨

中央教育審議会答申における国語科改善の基本方針に、言語の教育としての立場や、言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力等を重視することが示された。平成20年3月に告示された学習指導要領では、児童に主体的な学びの喜びと方法及び生きる力を獲得させることが、活用力の重視という形で強調された。これは、小学校において、語句や語彙、言葉の働きやきまりに関する事など学習で身に付けた言葉を日常生活で活用できる力を育成することの重要性を示している。

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査の結果によると、「読むこと」領域における「読み取った内容について自分の考えをまとめる」問題において、正答率が「おおむね達成」の基準を4.7ポイント下回っていた。これは読み取った内容について自分の思いや考えをもつことができる力、まとめる力が十分育っていないことを示している。

所属校1年生児童は、語彙量について個人差が大きい。また、身に付けた言葉について授業の中でのみ使うにとどまり、日常生活の中で生かそう、あるいは広げていこうという意識や態度が十分に育っていない。また、自分自身の実践を振り返ってみても、身に付けさせたい言葉の習得と活用についての指導を切り離して考え、授業を行っていた。今後は、教師自身が児童に何を習得させ、何を活用させるのかを明確にして指導を行う必要があると考える。これらのことから「読むこと」領域において、身に付けさせたい言葉の習得と実際に日常生活で活用できる力について、小学校1年生の段階から意識して指導していくことが重要であると考えた。

そこで本研究では、研究テーマ、研究課題を受け、「読むこと」領域の学習において、教師が児童に身に付けさせたい力と身に付けさせたい言葉を明確にする。そして、児童が読み取った文章の内容について自分の思いや考えをまとめる場面を設定すれば、身に付けさせたい言葉を確かに学び、自ら進んで使おうとする児童が育つであろうと考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

「読むこと」領域の読み取る学習において、3つの段階を踏まえながら、読み取った文章の内容について自分の思いや考えを書きまとめる活動に取り組みせれば、身に付けた言葉を進んで使う児童が育つであろう。

4 研究方法

- (1) 自分の思いや考えをまとめる言葉の習得と活用についての理論研究
- (2) 身に付けた言葉を活用できる「言葉日記」の手立ての考案
- (3) 児童の意識調査と身に付けさせたい言葉に関する実態調査及び検証授業

5 研究内容

- (1) 文献や先行研究を基にした自分の思いや考えをまとめる言葉の習得と活用についての理論研究を行う。
- (2) 身に付けた言葉を活用できる「言葉日記」の具体的な手立てを開発する。
- (3) 意識調査及び実態調査を踏まえて、所属校の1年生における「くじらぐも」(3時間)と「たぬきの糸車」(3時間)を用いた授業実践を行い、仮説を検証する。

6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

学校教育法において、「学力の重要な三要素」が規定され(第三十条)、特に第一と第二の「習得の定着」とこれらを「活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力」を育むことが明記された。それらを受けて佐藤は、「とりわけ習得・活用を重視した授業改革、国語科を中核にした言語力(言語技術)の系統的な授業開発・提案と検証が新たに必要である」¹⁾としている。

松木は、「作品について自分の考え・判断・解釈をもち、まとめることができること」²⁾を、小学校低学年で習得させたい読む技術の1つに挙げている。これは、学習指導要領の小学校低学年〔C読むこと〕の指導事項「エ 文章の中の大事な言葉や文を書き抜くこと」及び「オ 文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うこと」に当たる。また高宮は、「まとめる」作業では、より細かなステップもしくは支援が必要であり、必ず使う言葉を提示することやまとめる順番を示すこと等、教師の意図に沿ってまとめることが望まれると述べている。

また、宮崎は、特定の登場人物に視点を設定して文学的な文章を読むということは、読者が他者に「なる」ことによって、他者が見ているように「見る」ことも可能であると考えられ、その心情を実感的に理解することであるとしている。さらに、これは他者の共感的理解の一種であり、文学作品における心情理解や、他者理解において非常に有効な方略であると述べている。

以上のことから、「読むこと」領域の学習において、児童が身に付けた言葉を活用できる力を育成するために、次の2点をポイントにして研究を行った。まず、児童が自分の思いや考えをもつことができる、読み取りにおける学習段階の工夫である。次に、教師が型と視点を示すことによる、児童の身に付けた言葉の活用を高める「言葉日記」の取組である。

- (2) 実践化への手立て

理論研究を踏まえ、仮説に基づき、以下の手立てをとることで実践化に当たった。

ア 児童の実態把握

10月に事前調査を行った。意識調査では、感想を書きまとめるときに、自分の思いや考えについての理由を記述するかという質問に対して、「よくあてはまる」もしくは「あてはまる」と回答した児童は39%(7名)であった。また、実態調査では、教師が物語の読み聞かせをした後、感想を書かせた。その文章を分析した結果、理由となる具体的な文章の内容についての記述が無い児童や、おもしろかったなどの決まり文句を使って自分の思いを書く児童が多いことから、感想をまとめる力に課題があることが分かった。

イ 3つの段階を踏まえる読み取りの授業

児童に、身に付けた言葉の活用を促すために、読み取りの学習において3つの段階を踏まえる指導を行っていく(図1)。

まず、「I考える」段階とは、児童に自分の思いや考えをもたせる段階である。そのために、一人読みやペア読みなどを取り入れた十分な音読と児童一人一人に文章への書き込みをさせる。さらに、その書き込みを基に児童に自分の思いや考えを出し合わせ、想像を広げながら読み取らせていく。

次に、「IIまとめる」段階とは、読み取った文章の内容についての感想を書きまとめさせる段階である。まず、児童に単元で身に付けさせたい力につながる身に付けさせたい言葉を提示する。次に、例文でめあての確認を行う。もし、児童が書きまとめの方法や考え方について思い違いをし、修正の必要がある場合、もしくは、教師が指導したい意図がある場合には、その内容を組み入れた例文や児童の感想の記述を提示して意識させるようにした。その後、感想を書きまとめるための型と視点の違いによる4種類のワークシートの中から児童自身に選択させ、読み取った文章の内容についての感想を書きまとめさせる。

最後に、「III伝える」段階とは、友達に感想を伝えさせる段階である。書きまとめた感想をペアで伝え合わせたり、全体の場で紹介させたりする。その後、学習を振り返らせる。

上記の3つの段階を踏まえた読み取りの中の、特に、「IIまとめる」段階で「言葉日記」の取組を取り入れ、身に付けた言葉の活用を図るようにした。

ウ 「言葉日記」の取組について

単元で身に付けさせたい力を自分の思いや考えをまとめる力とし、その力を育むために、「言葉日記」の取組を行った(図2)。「言葉日記」とは、児童が感想を書きまとめるためのワークシートである。教師が身に付けさせたい力につながる身に付けさせたい言葉として、まとめ言葉を提示した(図3)。そして、それらの意味、使い方、例文等を示した後、2つの型と書きまとめるための視点を示した。

(ア) スモールステップによる2つの型

「言葉日記」にまとめ言葉を示し、手立てを加え、1年生児童が迷わずに使えるようにした。さらに、児童の意欲を喚起し、さらなる定着を図りたいと考え、「言葉日記」の型を2種類提示した。それは、基本型と応用型である(図4)。基本型とは、まとめ言葉の一つ一つを図と枠で示し、リード文と文末表現を付け、児童ができる限り自力で書きまとめられることを意図した形式である。応用型とは、まとめ言葉についてはチェック欄を設けて示す程度で、児童が枠や形にとらわれ過ぎず、自由な記述を意図した形式である。

(イ) 書きまとめるための視点

感想を書く際に、ただ書かせるのではなく、登場人物を選び、その視点で感想を書きまとめさせる手立てをとった。

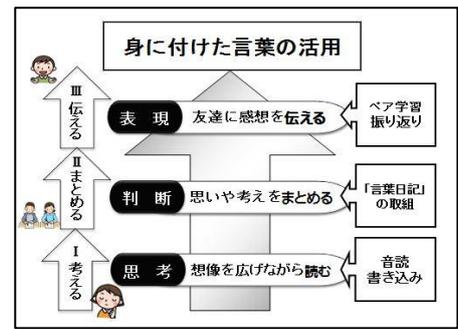


図1 3つの段階を踏まえる読み取りの学習

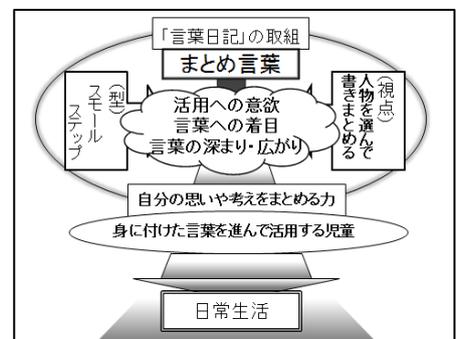


図2 「言葉日記」の取組

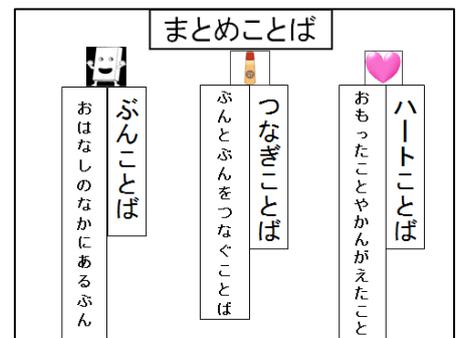


図3 感想を書きまとめるためのまとめ言葉

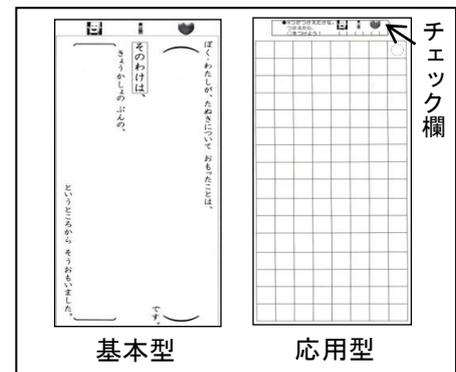


図4 2つの型の「言葉日記」

「言葉日記」には、登場人物を挿絵と言葉で示した。また、用紙の両面を使って登場人物の両方を印刷しておくことで、児童が活動途中であっても、児童の判断や意欲により、登場人物を変更したり、両方の登場人物について書きまとめたりすることができるようにした(図5)。

(3) 検証の視点

ア 【検証の視点Ⅰ】感想を書きまとめるための型を提示することによる身に付けた言葉の活用の高まり

読み取った文章の内容について感想を書きまとめる際に、まず、身に付けさせたい力である自分の思いや考えをまとめる力につながるためのまとめ言葉を提示する。その後、スモールステップで手立てを変えた2つの型の「言葉日記」を提示し、児童に選択させて書きまとめさせることで、身に付けた言葉の活用について高まりがみられたかを検証する。

イ 【検証の視点Ⅱ】視点を示すことによる身に付けた言葉の活用の高まり

感想を書きまとめる際に、自分の思いや考えにより強く影響した登場人物を児童に選択させ、その視点に沿って感想を書きまとめさせることで、身に付けた言葉の活用について高まりがみられたかを検証する。この視点については、検証授業①を終えた後、児童の身に付けた言葉についてのさらなる活用をみるために、検証授業②以降に設定し、検証を行った。

(4) 検証授業の実際

仮説の検証に当たって、第1学年の単元「くじらぐも」(11月)、単元「たぬきの糸車」(1月)を検証授業として行った。ここからは、主に単元「たぬきの糸車」について詳細を述べる。

ア 第1学年「たぬきの糸車」の概要

本単元は、場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読み、読み取った文章の内容について感想に書きまとめることができることを目標とする。その第2次における読み取りの学習過程において自分の思いや考えを書きまとめる学習活動を行わせた。

(ア) 【検証の視点Ⅰ】に関わる手立て

身に付けさせたい力につながる身に付けさせたい言葉として、まとめ言葉を児童に提示した後、2つの意図で例文を提示した。1つ目は、まとめ言葉の一つ一つを児童に意識させることである。2つ目は、自分の思いや考えを先に述べて、つなぎ言葉として、「そのわけは」でつなげ、後に理由となる文章の内容を述べる構成にし、理由を意識させることである。型については、検証授業②(1/3)で基本型のみを提示し、次時以降に応用型を提示し、2つの型からどちらかを選択できるようにすることで1年生児童が学び方を身に付けられるようにした。

(イ) 【検証の視点Ⅱ】に関わる手立て

1時間の流れの中で「I考える」段階において、児童に、たぬきとおかみさんのどちらに対して自分の思いや考えをもっているのかを意識させる必要がある。そのための手立てとして、ICTを活用し、それぞれの登場人物に関わる部分について教材文の色分けをして提示した。その後、ペアでたぬきの役かおかみさんの役かを決めて、音読をさせた。

さらに、自分の思いや考えについての記述を広げたり深めたりするために、児童の検証授業①や、検証授業の前後に行った実態調査における感想の記述から、共感・疑問・反発を表す言葉を分類・整理し、児童に紹介した。

(5) 検証と考察

検証の視点に沿って、検証授業①「くじらぐも」(第2時、第4時、第5時)、検証授業②「たぬ



図5 「言葉日記」の感想の記述例

きの糸車」(第3時～第5時)において、「Ⅱまとめる」段階における授業の振り返りとその時間に書きまとめた「言葉日記」の感想の記述で検証をし、考察を行っていく。

ア 【検証の視点Ⅰ】感想を書きまとめるための型を提示することによる身に付けた言葉の活用の高まり

まとめ言葉を使って感想を書きまとめることについての意識の変容を、学級全体でみる。授業の振り返りによると、検証授業①(1/3)では、「よくできた」もしくは「できた」と回答した児童が58%(11人)であった。その後、検証授業②(3/3)では90%(17人)の児童がそのように回答していた(図6)。

次に、児童の「言葉日記」の感想の記述における身に付けた言葉の活用について、まとめ言葉を使った完全な構成であるか不完全かである。完全な構成とは、まとめ言葉である

「自分の思いや考え」、「理由となる文章の内容」、前述の2つを「つなぐ言葉」の全てが揃い、かつ、文章の意味がつながる記述であれば、完全な構成とする。それに対し、まとめ言葉についてどれか1つでも記述が無かったり、文章について意味が通らなかつたりした場合は、不完全な構成とした。検証授業①(3/3)では、74%(14人)の児童が、まとめ言葉を使いながら、文章の意味がつながる記述をしていた。さらに、検証授業②(3/3)では、その割合が95%(18人)となった(図7)。

これは、第2次の読み取りの学習の毎時間で、まとめ言葉を使って感想を書きまとめる活動を行ったことや、まとめ言葉の指導をした後、「言葉日記」の2つの型を示したことで、児童自身が自らまとめ言葉を意識し、進んで使おうとする意欲が、感想をまとめる力の定着に結び付いたのではないかとと思われる。

イ 【検証の視点Ⅱ】視点を示すことによる身に付けた言葉の活用の高まり

抽出児童Z児の身に付けた言葉の活用の高まりについて、「言葉日記」の感想の記述を基に、3つの観点でみていく(表1)。Z児は、話を集中して聴くことが苦手である。そのため、指示を聞き返したり、思い違いをしたりすることがある。感想を書きまとめることについては、文章の意味がつかないことがある。

「量的高まり」、「質的高まり」、「関心・意欲」の3つの観点に関するZ児の、検証授業①(3/3)から検証授業②(3/3)への変容をみていく(次頁図8)。Z児は、検証授業①に比べて検証授業②の方が、3つの観点の全てにおいて高まりがみられた。特に、質的高まりについての伸びが顕著で、これは、まとめ言葉の深まりや広がりに加え、感想の記述の構成についても高まりがみられた。

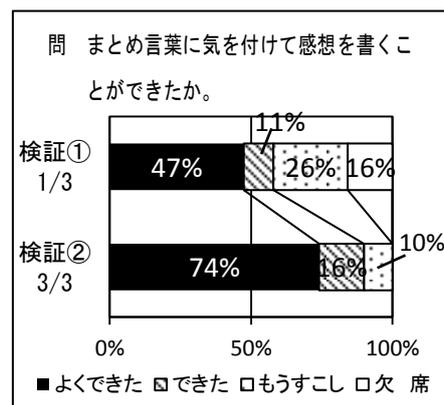


図6 児童のまとめ言葉について意識の変容(19人)

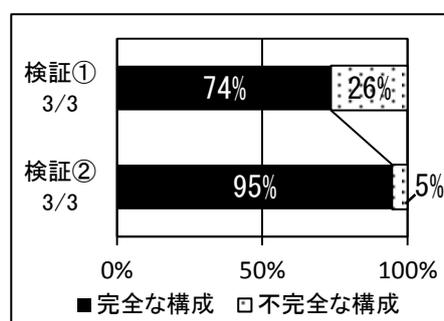


図7 「言葉日記」の記述における構成の分析(19人)

表1 身に付けた言葉の活用の高まりをみる3つの観点

観点	内容	A	B	C
		十分満足できる	おおむね満足できる	努力を要する
量的高まり	まとめ言葉	3つを踏まえたもの	3つを踏まえたもの	未記入・不十分
	文章の意味のつながり	視点に沿う	視点に沿っていない	意味がつかない
質的高まり	まとめ言葉の内容	深まり・広がり	基本 (ハート→決まり文句的、文→抜き書き、つなぎ→接続助詞、型)	未記入・不十分
	構成にみる活用	発展・深まり	基本 (ハート→つなぎ→文)	不十分
関心・意欲	「言葉日記」の選択	応用型	基本型	選択できない
	授業の振り返り	◎ (よくできた)	○ (できた)	未記入・△(もう少し)
評価	1つの内容について、A:2点、B:1点、C:0点とし、1観点の最大値を4点とした。			

検証授業におけるZ児の様子について述べると、検証授業①では、まとめ言葉の1つである、「理由となる文章の内容」としての文言について、登場人物の会話文であると思いをしていた。そのため、「自分の思いや考え」としてのハート言葉と文言との区別ができずに、文章の意味が繋がらなかった。しかし、検証授業②では、視点につながる活動に意欲的で、発言や気付きのつぶやきなどに積極的であった。そのため、2/3以降は、文言について、思い違いをすることなく、文章の意味が繋がる内容に書きまとめることができていた。

質的高まりを記述内容でみてみると、検証授業②(3/3)では、自分なりに文章の構成を進展させ、文言についても読み取った文章の内容について、書き換えて記述していた。これらの結果は、登場人物を選ぶという視点を与えたことや、そこに至るまでの教材文の色分けやペアによる音読に対して意欲的に取り組んでいたことで、意識を焦点化させて自分の思いや考えをもち、自信をもって感想を書きまとめることができたためと思われる。

(6) 実態調査による検証と児童の変容

検証授業の前後に、身に付けた言葉の活用の高まりをみるための実態調査を行った。できるだけ児童の日常生活に近い形の調査にするため、教師による物語の読み聞かせ後、児童に書かせた感想の記述で検証を行った(表2)。方法は、1つの物語につき1度だけ読み聞かせを行う。その際、文章の提示は行わず、内容について児童にイメージをもたせやすくするために、パワーポイントで作成した挿絵を読み聞かせに合わせて大型テレビで提示した。その後、物語の感想をマス形式のワークシートに書かせた。検証授業②の前後の調査では、2人の主要な登場人物から選んで書くという指示を加えた。これらの感想について、その記述内容で身に付けた言葉の活用の高まりについての検証を行った。

まず、感想の記述における文章の構成について完全であるか不完全かで分析をした(図9)。検証授業①前は、完全な構成に対して、不完全な構成の割合が多かった。それに対して検証授業②後では、完全な構成による感想の記述の割合が94%(17人)に増えていた。これは、検証授業で、教師が単元で身に付けさせたい力につながる身に付けさせたい言葉としてまとめ言葉を児童に示した後、基本型と応用型という2つの「言葉日記」の型を提示したことや、「IIまとめる」段階で、感想を書きまとめる活動を毎時間行わせたことで、児童に身に付けた言葉の定着を促したと考えられる。

次に、感想の記述におけるまとめ言葉の記述内容や構成について分析をし、検証を行った(次頁図10)。

「自分の思いや考え」としてのハート言葉について、検証授業①前は、B基準(おおむね満足できる)の決まり文句的記述が、61%(11人)であった。しかし、検証

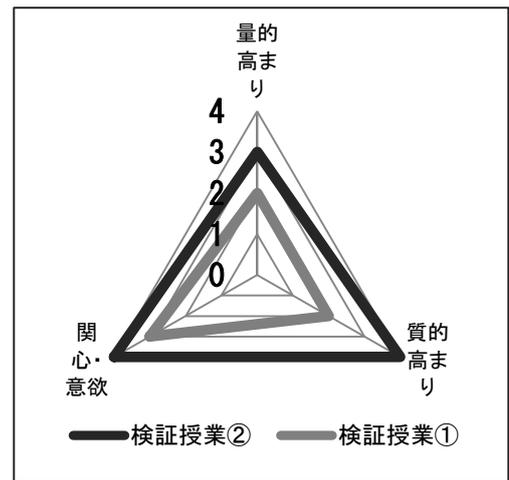


図8 検証授業①から検証授業②へのZ児の変容

表2 実態調査における読み聞かせの物語

時期	物語の題名
検証授業①前(10月)	「サラダげんき」(角野 栄子作)
検証授業①後(11月)	「どうぞのいす」(香山 美子作)
検証授業②前(1月)	「夕日のしずく」(あまん きみこ作)
検証授業②後(2月)	「お手紙」(アーノルド=ローベル作)

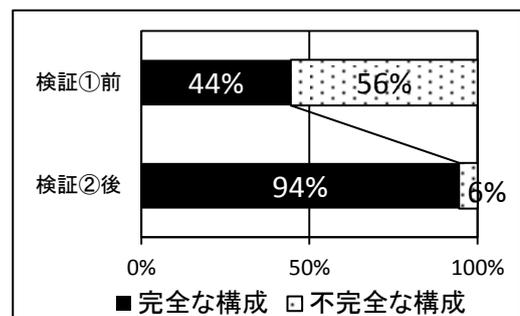


図9 実態調査の感想の記述におけるまとめ言葉(18人)

授業②後はその割合が減り、A基準(十分満足できる)の共感・反発・疑問を表明したり、自分なりに想像を広げて書き加えたりした記述の割合が100%となった。これは、視点に沿って書きまとめることで児童が登場人物と自分を同化したり、比較したりしたことや、教師が児童の感想の記述からハート言葉を分類して整理し、紹介したことによる身に付けた言葉の深まりと考えられる。

「理由となる文章の内容」としての文言について、検証授業①前では、理由となる文章の内容の記述そのものが無かったり、挿絵についての感想であったりと、不十分な記述の割合が72%(13人)であった。それに対し、検証授業②後は、6%(1人)となっている。また、検証授業①前の記述にはみられなかったA基準の、文や言葉に関係付けた記述や、文や言葉に書き足したり書き換えたりすることによる整理した記述の割合が、66%(12人)みられた。これは、児童が、視点に沿うために教材の文章を焦点化し、想像を広げたり、言葉と十分に向き合ったりして感想を書きまとめたことがうかがえる。

前述の2つを「つなぐ言葉」としてのつなぎ言葉の記述について、検証授業①前では、未記入や不十分が17%(3人)、B基準としての「が」や「と」、「から」などの接続助詞の記述が83%(15人)であった。これは、児童が日常会話で使用していることによるものと思われる。それに対して、検証授業②後は、つなぎ言葉の深まりが56%(10人)みられた。これは、実態調査で使用したワークシートの形式が応用型に近いものであったため、児童が、自分自身で構成に変化を付けたり、文章の意味がつながるようなつなぎ言葉を考えたりして身に付けた言葉を活用したと思われる。

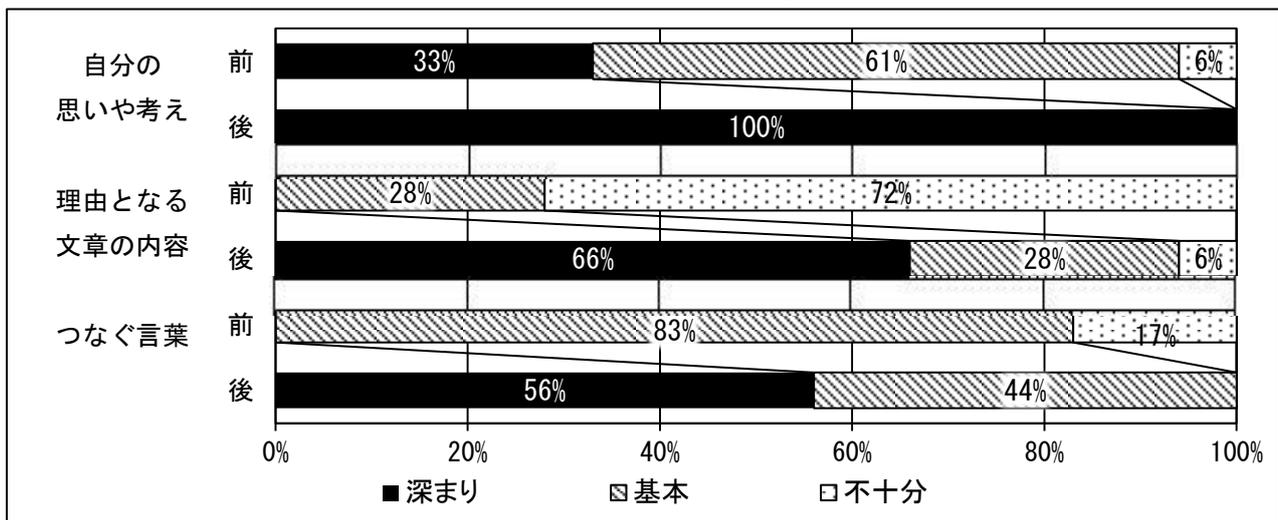


図10 事前と事後の実態調査における感想の記述についての比較(18人)

次に、感想の記述における文章構成の変容についてみる(図11)。検証授業①前は、72%(13人)の児童がまとめ言葉や記述内容に不備な箇所があり、文章構成としては不十分であった。しかし、検証授業②後は、全員の感想の記述が完全な構成となった。さらに、「理由となる文章の内容」と「自分の思いや考え」を入れ替える構成の発展が56%(10人)、複数のまとめ言葉で記述されている構成の深まりが44%(8人)に増えていた。これは、感想について、構成の基本を身に付けた児童がさらに、感想の記述を発展させたり深めたりする構成で、身に付けた言葉を活用したと考えられる。

抽出児童Y児の実態調査における感想の記述で身に付けた言葉の活用の高まりについてみる(次頁図12)。Y児は、読書量が多く、文章の内容を読み取る力がある。しかし、自分の思いや考えを書きまとめることについては、消極的で文章の量も少ない。Y児の実態調査における感想の記述によると、検証授業①前の記述Aでは、文章の量が少なく、

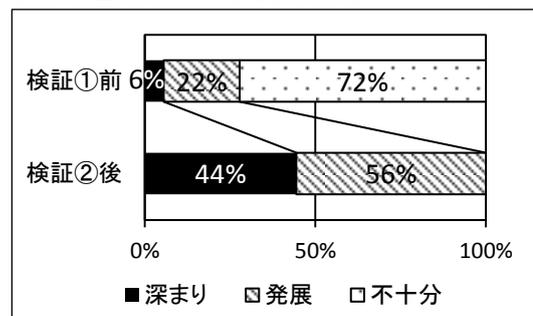


図11 感想の記述における文章構成の変容(18人)

まとめ言葉は、「自分の思いや考え」のみ記述されていた。それに対し、検証授業②後の記述Bでは、文章の量が増え、まとめ言葉の全てが揃っている。これは、Y児の身に付けた言葉の活用の高まりと考えられる。

(7) 検証授業後の意識調査

検証授業後、2月に児童に身に付けた言葉について意識調査を行った(図13)。感想を書きまとめる際に、まとめ言葉を意識するかというまとめ言葉の有用性についての項目では「とてもあてはまる」もしくは「あてはまる」と回答した児童が合わせて66%(12人)いた。また、国語以外の教科におけるまとめ言葉の活用意識については、66%(12人)の児童がそのように回答していた。これは、感想を書きまとめる際のまとめ言葉の意識や活用についての児童の意識が、徐々に高まっていることを表していると考えられる。

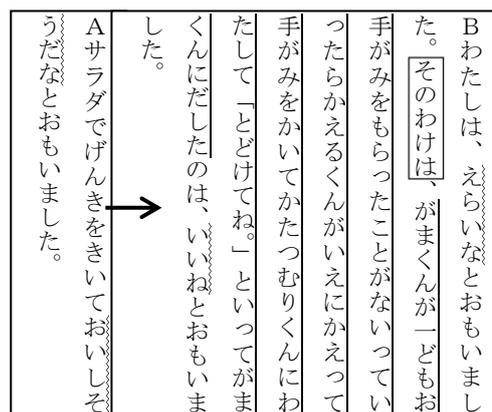


図12 Y児の実態調査における感想の記述の変容

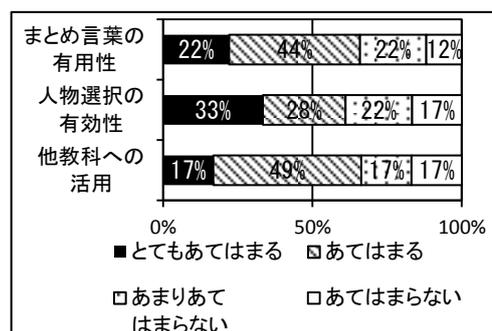


図13 検証授業後の意識調査(18人)

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

本研究を通して、次のことが明らかになった。

- ・ 読み取った文章の内容について、児童に複数のワークシートの型から選択させて自分の思いや考えを書きまとめさせることは、身に付けた言葉を進んで使おうとする児童の意欲を喚起するだけでなく、身に付けさせたい力の定着にも有効であるといえる。
- ・ 読み取った文章の内容について、児童に視点を与え、その視点に沿って自分の思いや考えを書きまとめさせることは、自分の思いや考えをより明確にまとめようという児童の意識につながり、身に付けた力や身に付けた言葉の活用の高まりに有効であるといえる。

(2) 今後の課題

- ・ 児童が、身に付けた言葉をさらに質的に高める指導の在り方を探る。
- ・ 自分の思いや考えをまとめる力の系統的な指導の在り方を探る。

《引用文献》

- 1)2) 国語教育研究所編 『言語技術教育研究 2「習得と活用」を重視した授業』 2012年 さくら社 pp.32-47

《参考文献》

- ・ 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 国語編』 平成20年8月
- ・ 寺井正憲・吉田裕久編著 『小学校 学習指導要領の解説と展開 国語編』 2008年 教育出版
- ・ 宮崎清孝・上野直樹著 『視点』 1985年 東京大学出版会

《参考URL》

- ・ 高宮 佳彦 「PISA型読解力 PART 1」
cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/data/102308/.../4a1a2988efa04.pdf (2012年11月)